

看護の専門性と魅力を再確認

結城市市民文化センター「アクロス」小ホールで9月3日午後6時半から、聖路加国際大学看護学部の前学部長、菱沼典子教授を招き、「看護における形態機能学—看護の専門性を考える」をテーマに講演会を開きました。講演会には城西病院や結城病院、筑西市民病院、協和中央病院、下館病院などの看護師、結城看護専門学校、真壁准看護学院の教師や生徒などが出席。前場文夫市長、臼井平八郎県議も駆け付け、看護の魅力について改めて認識を深めていました。

菱沼教授は、筑波大学大学院修士課程医科学研究科を修了。東京都医療審議会委員、中央教育審議会委員などを歴任するなど、看護界のリーダーとして活躍しています。講演では、人体の構造と機能を看護の現場から分かりやすく示し、看護の役割の大切さを解説しました。

菱沼教授は、看護師としての体験を通して「個人的体験で、赤ん坊から老人まで看護師が聴くのは、食べる、出す、眠るの3つ。例えばベッドの上だけでもその日の暮らしがあり、それを支えるのが看護」と位置付けました。

「看護は、人間に働きかける仕事で、人体についての知識が必須」と、解剖生理学の大切さを説きました。看護機能学の観点から、動く、食べる、息をする、トイレに行く、話す・聞く、眠る・日に当たる、お風呂に入る、子供を産む—に分けて生理学や解剖学の観点から説明しました。

「病人は常に病気と戦わざるを得ない。しかし、常に戦い続けていると疲弊していく。その闘いの中でホッとする時間を作るのが看護」と語る菱沼教授。「看護する中で患者が『ホッとした』『ひと眠りできた』『おいしかった』『すっきりした』『気持ちいい』という感情を持つときは、患者の体の調整力が呼び戻される瞬間であり、患者が自分らしさを取り戻すきっかけでも



あります」と強調。看護の重要さや役割、やりがいなどを伝えました。

平成27年9月7日



菱沼教授が形態機能学の観点で講演